

成實と言ふもの。幼より穎悟、常に和歌を好んだ。後、足利學校に入る。上京後は屢々禁裡に召され、源氏物語等を侍講し、法橋に叙せられた。本縣猪苗代の人、永正七年、下總古河で歿した、年五十九。

三日の夜は月も冬野の薄かな

山は雪潮は氷の鏡かな(猪苗代にて)

夢散りて名のみ残すや塚櫻(辭世)

四 謡曲

田村 二番目。世阿彌元清作、勝修羅物三作の一。複式夢幻能。東國方の僧が都に上ると清水寺花守の童子清水寺の縁起を語り、四邊の名所を教へ、やがて田村堂に入つて了ふ。僧は夜中櫻の木蔭で讀經してゐると田村鷹の靈出で、勅命を奉じて惡鬼を征伐したことを語る。

采女 三番目。世阿彌元清作、戀幕物の謡曲。複式夢幻能。奈良春日神社へ參詣の僧を里女が穢澤池に導き、我こそはこの池に身をなげた采女であるからと供養を頼む。僧が佛事をしてゐると采女の靈が出て葛城王の心を和げた安積山の采女の昔を語りそして舞を舞ふ。

忠信 四番目。世阿彌元清作、判官物の謡曲。一段劇能。佐藤忠信は義經が吉野を逃るゝ時防矢を射て後虚腹を切つて谷に落ち、衆徒を欺いて逃れ都へ急いで行つた。次の「攝待」と共に「義經記」による攝待 四番目。宮増作。判官物の謡曲。一段劇能。山伏姿の義經一行十二人が佐藤繼信の館で、そ

の母と遣子鶴若の攝待に逢ひ、母の歎きをきゝ遂に義經主従であることをうちあけ、繼信討死の有様を母子の前に物語る。

安達原 五番目。金春禪竹作。鬼女物の謡曲。二段劇能。古く近江猿樂で演じたものを禪竹が改作したものらしい。拾遺集平兼盛の「みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりと言ふはまことか」を敷衍した大和物語の記事に基づいたもの。鬼女が山伏に祈り伏せられる。

愛壽忠信・鶴若・鈴鹿・飯野・信夫 これ等も福島縣關係のものである。

五 軍記

平治物語 軍記物語の生長期に出現した文學であるが、その中に「頼朝義兵を擧げらるゝ事並に平家退治の事」に義經に従軍する信夫の佐藤三郎同四郎兄弟のことが見え、又「牛若奥州下りの事」の條には秀衡が郎等信夫の小太夫の名が見え、その子三郎四郎が義經と主従となつたことが見えて居る。又會津の乗丹房の話もある。

平家物語 軍記物語の隆盛期に出現してその王座を占めた文學である。卷九「三草勢揃」の條に奥州佐藤三郎嗣信 同四郎忠信の名が見え、卷十一「逆櫓」の條には嗣信が判官の下知に従ふさまが見え「嗣信最期」の條には殊勝なる戦死のさまを描いてあり、「弓流」「壇浦合戦」の條には忠信の名が見えてゐる。

源平盛衰記 大體同様の記事がより説話的に記述せられてある。

義經記 軍記物語の轉換期に出現した文學「吉次が奥州物語の事」の中には厚樫山の戦が見えて、菊田の關・伊達のあつかしゑ山・安達の郡・白川の關・淺香の沼・信夫の里・摺上川等の語も見える。又「忠信吉野にとゞまる事」には佐藤兄弟の武人として面目を詳細に描いて居る。その外この「義經記」中には關係する部分が非常に多いのである。

六 叢話

宇治拾遺物語 原作は建曆二年から承久三年までの十年間に成つたもので、今昔物語の補遺であらう福島縣關係の、傳説上の人である阿倍清明の記事「清明藏人少將を封する事」「清明を試る僧の事付晴明蛙を殺す事」等がある。

十訓抄 第十、七四段に信夫の郡司なる大庄司季春が國司の命に抗して遂に失はれたことが記されてゐる。

古今著聞集 建長六年橘成季の撰。十訓抄と共に稍批評的に記載されて來たのが、本書の特徴である卷五には能因の「都をばかすみとゞもに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」の歌に關する説話があり又「あさか山かけさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものは」の歌に關する説話があり、卷二十には田村郷の住人馬允某といふ獵人が出家するに至つた鴛鴦相愛の悲しい説話が見える。

七 紀行

都のつと 釋宗久の著。宗久は平吉氏、筑紫の人、性和歌を好み出家して萬里を雲遊し、日本六十餘州足跡の至らざるところがない。觀應中、大江山の寓居を發して、東奥松島に至り記を作つたのがこれである。二條良基は嗟嘆して跋を作つた。白河・淺香沼・逢隈川のことが見える。

廻國雜記 藤原道興の著。文明十八年六月北陸・東海の諸州を遊歴して松島、名取川に至るまでの紀行。全體は名所・舊跡等の巡歴記で中に俳諧・連歌道等文學上の記事も多いのは時世の反映である福島縣關係の部分には名所に和歌を多く蒐めてあるのが目につく。

七 評論

神皇正統記 福島縣靈山神社の御祭神であられる准后親房の著、作者の國體觀を闡明した歴史評論であつて建國の昔より後村上天皇の即位にまで及んでゐる。その烈々たる愛國の至情は凝つて一大文章をなしたもので、記事中福島縣に關係する部分も多い。

八 お伽草紙

田村の草紙 二卷。作者不詳。室町期の成立である。英雄譚・怪物退治説話・觀音靈驗談で本地物俊仁・俊宗父子二代の武功を叙してゐるが、俊宗は本縣關係の坂上田村麿にあたり、蝦夷征伐で有名である。この草紙は、近松作「田村將軍初觀音」淺田一鳥・豐田正藏合作「田村麿鈴鹿合戦」等にも影響

してゐる。

九 歌謠

磐梯神社の田植歌 鎌倉時代のもの。建治元年其の地の惠日寺の座主慶有の古記中にある。今その五首の中の二首抄録を見るに五七調の長歌に近い古體であつて、或は平安時代の初期頃からの歌が少しづつ變化したのかも知れぬ。

常磐なす 磐梯山の 裾わ田に 澤水をせき入れて 清水をひせきかけて 取るや早苗 植うるや
若苗 秋立たたば さき立たばしなへ 八束穂にしなへ 神の神饌みけのまけに 大神の豊食とよけのみ
けまけにや

磐梯山に 雲の棚引き 棚引きて雲井棚引きて 雨そぼふる 取れや若苗 植うれや少女 笠もき
るな 小笠もかぶるな 植うれやく大御田 取りたとれ若苗 ふし立たぬ間に さふしたぬ間に
繼信忠信記 繪巻物。詞書を二條爲重の筆と巻端にあるが、爲重は新拾遺集の撰者で至徳二年享年五十二で薨じた。これは疑もなく幸若の舞曲の八島と同一であらうと高野博士は推定してゐられる。

□ 江戸時代

一 概説 江戸三百年間は天下太平、文運大いに起つた時代であつて、福島縣に於ける文學も大いに

燦然たるものがあつた。これは主として本縣に於ける當時の各藩が、競うて文學を奨励したによるもので天下に名をなした學者文人も決して少くない。今國學、儒學と順を逐うてその梗概を示さう。

二 國學・和歌

松平定信 田安宗武の子。父は純萬葉派であつたが、清水濱臣に問ひ新古今風を喜んだ。六家集を愛讀した。教訓風のものには佳作はないが、然らざるものに情味掬すべきものが多い。白河の城主で、晩年樂翁と號した。文政十二年十二月十六日歿。年七十二。「三草集」「花月草紙」等が有名である。

宵やみに思ひもよらず遠山のすかたかつ見る稻妻のかけ

風をあらみむらだつ雲のたえまより日かけながらに霞ふるなり

小沼幸彦 通稱半七。小沼伊賀十代の孫、本宮の人。寛文の始め本居宣長の教を受け、その「神代系圖」は宣長の推賞するところとなつた。宣長の歿後は本居大平と交つた。著書多きが中に「石井清水考」等は有名である。文政五年七月十五日。年七十七歿。

澤田名垂 五家園・木隠翁・會津藩の世臣、幼より學を好み和歌をよくし、長ずるに及び上京して芝山大納言持豊の門に入り斯道の奥義を極む。又本居大平の門に遊ぶ。弘化二年四月歿。年七十一。著書が多い。めづらしく春をとなりの中垣に匂ひへだてぬ梅の初花

竹の子を雪にほりけんさむみよりまさる氷の床のうたゝね (物名、源三位頼政)

行く秋もしばしせくかと谷川のぬくひによどむみねの紅葉ば

石金音主 信夫郡瀬上の人。國學者内池永年に學ぶ。通稱左次兵衛。文化十年二月、本居大平の門人となつて、古學を研究した。その著「古言本音考」は文政十年の作で大平の序があり、わが上古の聲音には濁音のなかつたことを論定したものであつた。

野矢常方 歌人にして武人、嘗て京都で加茂季鷹に會つたが、その和歌の奥義に至つたのを歎賞して「天下の歌人」と稱された。和歌は澤田名垂に學んだが、その後を受けて和歌所の師範を兼ねて居た。

戊甲の際八月二十三日の戦に斃れた。年六十七。高等小學校讀本には左の一首が載せられてゐる。

君がため散れと教へて己れ先づ嵐に向ふ櫻井の里

木口訓重 其の子弘記は信夫聖人と稱された人。父子共に和歌に造稽が深かつた。訓重は幼名重義雅舎と號し信夫郡の人。足代弘訓の高弟である。古今風の歌をよくしたが、今多く散佚したのは惜しむべきことである。明治七年十二月十二日歿、年三十八。

小やみなく降る村雨に秋萩の花すり衣ほすひまぞなき

櫻さく八幡山崎よそに見て花に掉さす淀の川舟

さゆる夜は霜に色香もあせなんと心おかる、白菊の花

安藤野雁 岩代國半田銀山の小吏の家に生れた。通稱謙次、後に刀禰と言ふ。國學に志し江戸番町

にて塙忠賢の塾に學ぶ。晩年は諸國を放浪して慶應三年三月二十四日、五十八歳で武藏國に客死した。酒を嗜み、風彩に無頓着で頗る奇行に富んでゐるが純情であつた。歌風は傳統を脱して自由、個性的である。「野雁集」「萬葉集新考」等がある

ゑひみだれ花にねぶりし酒さめてさむしろ寒し春の夕暮

軒端よりふりさけ見れば富士の嶺はあまり俄に立てりけるかも

秋ふくるいほりの餘り淋しきに盗人だにも入りて來ななん

三 儒學・詩人

山鹿素行 會津の人。九歳江戸に出て、林羅山の門に入り、十一歳にして論語を講ず。若くして聖教要録を著す。その識見時流を抜く。英邁にして記憶強く、且至誠の人であつた。後年赤穂侯に寄つたが侯の信任を得、其の教育は後年四十七士を出すに至つた。「中期事實」其の他の著が多い。貞享二年九月二十六日歿、年六十四。

山崎闇齋 名は嘉、字は敬義、天資剛邁保科正之に聘せられて會津にあること八年獻替するところが多かつた。一世の鴻儒。朱子學者であつて日本主義の偉大なる教育家であつた。天和二年九月十六日歿年六十五、「會津風土記」その他の著が多い。

平野金華 小字源右衛門、器宇偉然少うして曠達、一世を空うするの詩才があつた。守山侯に仕ふ。

荻生門下の高弟、元祿元年に生れ、享保十七年七月二十三日歿した。歳四十五。始め醫を學ぼうとして江戸に上り、遂に徂徠の門に入る。最も詩に長じ、風格雄華なものが多い。「金華稿刪」はその詩文をあつめたものである。

大内熊耳 唐津侯の儒員、名は承祐、字は子綽、忠太夫と稱す。三春の人。初め秋元子帥に學び後荻生徂徠の門に入る。詩名を天下に馳せ時人は稱するに干鱗を以てしたほどであつた。安永五年歿した。年八十。

石金瀬濱 名は宣明、字は子誼、多仲と稱す。その家は代々農であつたが、宣明に至つて始めて學に志し、江戸に上り、大内熊耳の塾に寓すること十年、刻苦精勵經史に貫通した。年二十九、芝三田に塾を開き、名聲大いに擧つたが偶々疫のため寶曆八年歿した。年三十八。「嘉隆文體」「瀬濱遺草」の著がある。岩井田昨非 名は希夷、幕府の儒臣桂川彩巖に學ぶ。賦するところの詩文は無用の題詠を以てせず一家の見を有して居た。享保中二本松藩の儒員となつて重用せられた。寛延中藩廳前に戒石銘を刻して有名である。寶曆八年三月十四日歿した。年六十。

松本重信 字は實、通稱來藏、寒緑と號した。會津藩儒の家に生れた。長じて昌平黌に入り後天下を遍歴して形勢を縦覧した氣慨の士であつた。藤田東湖・鹽谷宕陰等とよく交つた。天保九年伊豆沖視察中難航して歿した。年五十。

安積良齋 幕末日本に於ける儒宗、通稱祐助、名は重信、郡山に生る。天資聰明、神童の名があつたがよく刻苦勉勵した。若年江戸に出て佐藤一齋の門に入り文化八年二十一歳にして林家に入門した。文章艶麗自ら一家の機軸をなした。嘉永三年拔んでられて昌平黌の儒官となる。その門には南摩綱紀・秋月章軒・吉田松陰・岩崎彌太郎・高杉晋作・大須賀筠軒・岡鹿門等俊足豪傑が多い。萬延元年十一月二十一日歿、年七十。

神林復所 平藩の儒者、通稱清助、若冠江戸に出でて佐藤一齋の門に入り、二十五歳歸國して藩儒となり、六十四歳にして引退した。身體肥大、宋子に精しかつた。明沼十三年歿した、年八十六。著書二百四十八部、其の子惺齋・筠軒共に名を成した。

堀江半峯 二本松藩の人、父は惺齋、通稱仁藏、若くして江戸に出で安積良齋、佐藤一齋の門に學んだ。歸國後は藩校教授となつたが後福島に移住して作新塾を起した。弟子一千五百人。明治二十一年七月十日歿した。年七十。

富田高慶 相馬の人、若うして江戸に出で屋代弘賢の門に投じ、尋で昌平黌に入り、安積良齋等と交り、治國安民の道を探る。後二宮尊徳の門に入り、相馬に報徳の仕法を施した偉大な實學派の漢學者である。明治二十三年歿、年七十七。

相樂等躬 須賀川の驛長。通稱伊左衛門、乍單齋、始め江戸の石田未得の門にあつたが、元祿二年芭蕉奥の細道行脚の際蕉門に入り、句風を一變した。滯在中「風流の始」「軒の栗」の俳諧外に三つ物二卷を残した。晩年石城の内藤露沾に聘せられて平に寓した。「軒の栗」の句で有名な栗齋可伸は等躬の厚遇を受けたものらしい。寶永二年十一月四日歿、年七十八。

鉢たゞきさて洛外はどこまでぞ

星月夜落葉さらへば落葉かな

とても死ぬ身なら難波の枯野かな (芭蕉追悼)

内藤風虎 在京太夫、名は義泰、磐城平城主、また紫硯・紫軒・風鈴軒・白藤子の號がある。西山宗因に學び談林風をよくする。貞享三年五月二十九日歿、年六十七。俳諧集の撰に「櫻川」「夜の錦」「信田の浮島」「六百番俳諧發句合」がある。和歌・連歌をもよくし遺作が多い。

五月雨や尾上の鐘も龍宮城

内藤露沾 名は義央、遊園堂・停園堂・停池亭の號がある。風虎の二男兄夭折のため嗣子となる。讒にあひ幽閉。元祿八年磐城に下り高月に隱居し家督を息豊松にゆづつた。父と共に西山宗因に學んだ。須賀川の相樂等躬を聘して待遇した。又芭蕉・其角を招いて唱和し東奥俳壇の重鎮であつた。句は談林の諸集に見える外蕉門の集に見え七部集に猿蓑以下六句ある。享保十八年九月十四日歿、年七十九。

代々の秋四倉富めりかつを船 (陸奥四倉の浦)

梅咲いて人の怒の悔もあり

温石おんじやくのあかるゝ夜半や初櫻

安藤冠里 名は信友、含秀亭と號す。磐城平の城主、信博の子であつて従四位侍従に叙せられ對馬の守と稱した。徳川吉宗に仕へて幕府にあつて老中を勧めた。寶井其角に學び、俳諧を以て名高い。享保十七年七月二十五日歿した。年六十二。次の句は人口に膾炙するところである。

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

藤井晋流 通稱太仲、寶井其角の高弟、須賀川の人、寶永二年二十六歳で等躬の追悼會を行ふ。後に江戸及び京阪に遊ぶ「蕉門録」二冊を著す。寶曆十一年歿、年八十二。名利に淡く諸國を遊歴したので旅行吟に秀逸が多い。

五月雨の雪を絞るや女人堂 (高野山にて)

松風の琴を離れて身にぞ入る (露沾公御中陰)

懷爐とは胸にたく火の餘りかや

關本巨石 近世會津俳壇の先輩、名は直爲、通稱與次兵衛、學を好み徳行を以て一郷に仰がれた。蕉風に遊ぶこと多年、たゞその師を明かにしない。文化二年六月歿、年七十。その子如髮は「河上集」を著

した。如髪の友田中月歩も亦俳名が高い。巨石の孫直有・曾孫半岱・椿二等一族に俳人が多い。その友冥々や祖卿も有名である。

影落ちて星にも聲の蛙かな

木枯や窓を越すかと波の音

松窓乙二 奥州白石の修験で福島縣に關係が深い。互利氏、清雄と稱す。中年俳に志し獨學自得遂に宗師となる。門人多代女の記に「師傅なし」とある。道彦・成美等と往來し月居と併せて當時の四大家である。即吟に達し蕪村を慕ふ。文政六年歿、年六十九。門人一具・多代女等。「乙二七部集」がある。

かけ登る背戸山あれや秋の月

さびしさの冬の主かな我が佛

鹽田冥々 天明の六俳の一人である白雄の高弟、白雄八弟子の一人として白石の乙二と並稱せられた東北の巨匠である。名は爲春、通稱茂平、別號九淵齋、奥州本宮の蠶種商であつた。郡山に生れ四歳にして縁族叔父鹽田長十郎に養はれた。冥々は孝心が深く妻子の慈しみも多かつた。秋夫・幸彦と共に本宮の三傑と稱された。文政七年八月二十二日歿、年八十六、「冥々句集」がある。

つくつくと影法ひとり秋の風（幸彦身まかりし時）

雨ちるや萱原はしる鹿の角

山百合や温泉の香酸き風の筋（土湯にて）

石井雨考 通稱久右衛門、夜話亭と號した。須賀川の人二階堂桃祖の門人中著名なるもの。文政十年七月六日歿、年七十九。

たのしさを霰をはしく夜話の聲

梅が香の花に戻るや朝ぼらけ

高梨一具 福島大圓寺の住職であつた。山形の産、名は思春。始め夢南と號し後一具庵。文政中、寺を捨てて、乙二の門に入り俳諧師となる。天保の蒼虬、梅室等に伍して遜色がない。嘉永六年十一月歿、年七十二遺骨は遺言により灰にして大河に流したと言ふ。門人右通は野木氏、白川竹貫驛の庄屋である。

正月や雁のおりたる麥畑。

こてこてと夕顔さきぬ藏の跡

花の中鎖の下りたる庵かな

市原多代女 須賀川の人、晴霞庵、文化二年三十一歳にして寡婦となる。乙二に學びその死後は一具に隨侍した。慶應元年八月二十日歿、年九十三。幕末の女流俳人としてあらはる。七十八歳の時「多代句集」を著し翌年「辭世集」を著す。

花は目に残りて耳に時鳥

すゝ棚や雪の降り込む油皿

終に行。道は何處ぞ花の雲（辭世）

山邊清民 名は頼之、是非庵・觀山居の號がある。須賀川の人、父は應之。父子共に俳諧に名がある。慶應三年十二月九日歿、年七十五。

この寺は名月寒し露の音

五 小説

安倍晴明記 江戸時代小説の先驅である。假名草紙、三卷、淺井了意の作、本縣と傳說的關係を有する安倍晴明について、その學才・見識・經歷等を假名書にし、繪畫を挿入して詳細に記してある。併しまゝ俗説もあつて正確な史料ではないまでも假名草紙としては重んずべきものである。

復讐奇談安積沼 讀本五冊、享和三年刊、作者山東京傳。角書に「小幡小平次死靈物語」とある。美少年喜次郎の敵討、安積沼で慘殺された小平次の怨靈が災すると言ふ二説話に基づいて本縣の名所安積沼を取入れたものである。偶々時好に投じたので大に行はれ屢々劇に脚色されて上演せられた。

信夫摺在原草紙 中川昌房作、鬼武校、文化五年刊、伊勢物語を素材として陸奥・忍摺の姉妹を描き特に忍摺と業平とを中心として敵討の趣向を扱つたものである。健氣な女丈夫忍摺の敵討は筋が複雑で作者の狙ひ所もそこにある。

勿來關 感和亭鬼武作「在原草紙」より後の刊行である。福島縣の歌枕「勿來關」に關係した物語。作者鬼武は山東京傳の門人で「自雷也物語」等て有名な讀本作家である。

安部清明辻策帖 合巻物、文化十三年刊、福島縣に傳説上關係ある陰陽師晴明についての物語である。作者鼻山人は山東京傳の門人である。

六 戯曲

田村將軍初觀音 淨瑠璃、時代物、元祿時代の文豪である近松門左衛門の作である。福島縣に關係深い坂上田村麿に關する時代物である。

奥州安達原 淨瑠璃、五段、時代物、近松半二等四人の合作、寶歴十二年九月十日より竹本座に上演。前九年合戦後の貞任兄弟を中心としてそれに安達原傳説及び善知鳥傳説を配したものの結構雄大、趣向複雑であつて、半二時代物有數の作品であり、今日なほ舞臺的生命を有してゐる。所謂奥州攻戯曲の集大成である。

田村鷹鈴鹿合戦 淨瑠璃、五段、時代物、作者は淺田一鳥、豊田正藏の二人、初演は寛保元年九月十日より豊竹座でやつた。紀海音の「坂上田村麿」と山本土佐據の「阿漕の平次」とを取交せて脚色したもので當時評判のものであつた。

七 紀行

奥の細道 元祿の俳聖松尾芭蕉の俳文、作者は元祿二年三月二十七日江戸の寓居を出發し日光・那須野・白河・須賀川・飯坂・仙臺・松島・平泉を経て裏日本に出で、日本海に沿うて南下し敦賀・大垣に出で九月六日伊勢参宮をしようとして乗船するまでの紀行である。俳文の上乗で書中の俳句も亦傑作が多い。こゝには福島縣關係の句のみを抄出する。

卯の花をかざしに關の時着かな 曾良

風流のはじめや奥の田植歌

世の人の見つけぬ花や軒の栗

早苗とる手元やむかししのお摺

笈も太刀も五月にかざれ紙織

蝶の遊 又『續奥の細道』ともいふ。山崎北華の紀行文である。北華は江戸の人、名は俊明、通稱は三郎右衛門、自墮落先生と號した。この行は元文三年であつて芭蕉行脚後正に五十年目である。やはり句を詠み入れてあるが芭蕉には比すべくもない。

奥の荒海 作者は岡田士聞の妻、作者は松前氏に嫁した花山院家の女に従つて、松前に下り在島七年女の死歿によつて歸洛した。安永六年八月八日に發して十月二十一日に上洛したが、これはその紀行である。本縣の部分についても女流の筆づかひが見える。

東遊記 五冊、諸國奇談と角書がある。橋南谿の作。寛政七年から九年までの刊行である。作者は京都の醫者、醫學修業のため關東・東山、北陸の各地を旅行したが、その際の見聞した奇事・珍物・勝景・崎人等を録したもの、地理・歴史・本草・土俗に關する好資料である。文章は平明達意で興味に富む。福島縣に關係するものでは「漢文帝」に關するものがある。

八 地誌

會津風土記 我が國奈良朝時代に國々に撰せしめられた所謂「古風土記」は多くは散佚して今や出雲・播磨・常陸・豊後・肥前の五種よりない。江戸時代四代將軍の頃に官撰のものが企てられたが、これと前後して民間のものも生ずる氣運になつた。この時に幕府の元老たる保科正之の撰したのが會津風土記であり、正之は又諸侯に向つて各藩誌を編纂するやう慫慂したのであつた。かゝる意味で所謂名勝記として日本文學史上にも重んぜられてよいものである。

□ 東京時代

一 概説 江戸時代後期から福島縣の文學は、各藩學を中心として、長足の進歩をしたのであつたが、東京時代に至るに隨ひ、福島縣は益々文學の各分野に偉人を中央に送つてゐるのである。即ち福島縣と中央文壇とは、東京時代以後は一層その關係が緊密になつて來たのであつた。例へば、漢學に於け

る南摩綱紀・大須賀筠軒・服部宇之吉、小説・評論に於ける東海散士・高山樗牛・野村隈畔・久米正雄
和歌・俳句・詩に於ける天田愚庵・三森幹雄・大須賀乙字・柳澤健等はその尤なるものである。その他
中央文壇と直接的に關係のない福島縣各地の文人も決して少くないのである。

二 漢學・漢詩

秋月章軒 名は胤永、會津藩士、弘化三年昌平費に入り學成るや君側にあつて藩の機密に與る。後熊
本高等中學校教授として赴任して居た時は同地の師團長として熊本にあられた能久親王に經史進講を申
し上げる事毎月數回であつた。明三十三年一月五日歿、年七十七、詩文をよくし書に巧であつた。

廣澤安住 若くして江戸に上り昌平費に學ぶ、讀書講學を以て衆に秀で、その議論の如きは常に人の
意表に出た。碩學南摩羽峯と友として親しく交つた。實學派の漢學者で明治九年車駕東巡の際明治天皇
は安住を召してその事業を嘉賞あらせられた。明治二十四年二月歿、年六十三。

南摩綱紀 羽峯と號す。會津藩の世臣、文政六年十一月生る。年二十五江戸に上り昌平費に入り漢學
を講習し旁ら洋學にも志す。當代の碩學として名高かつた。特に漢學に長じ、御前進講の榮譽を荷ふこ
と前後三回に及ぶ。明治四十二年四月十三日歿、年八十七。「内國史略」其他の著がある。

大須賀筠軒 字は子泰、通稱次郎、筠軒・應渚は其の號である。平藩の儒者神林復所の次子として天
保十二年十二月生れた。江戸に上つて昌平費に學び安積良齋に師事して造詣頗る深いものがあつた。

詩文書畫に長じ、第二高等學校教授として仙臺にあり、辭職後も子弟に教授した。大正元年八月二十六
日歿した。年七十二。

服部宇之吉 慶應三年四月三十日二本松町に生る。夙に學窓の人となり、明治二十三年東京帝大哲學
科を卒業し第三高等學校・東京高等師範學校等の教授を経て明治三十五年東京帝國大學文科大學教授と
なり、文學博士の學位を受けた。その間支那へ留學して漢學を研究し、獨逸に留學して教授法の研究を
した後北京大學に聘せられたが明治四十二年再び東京帝國大學文科大學の教授となつた。博士は漢學及
び支那哲學に於ける我が國の權威である。

三 小説・評論

佳人の奇遇と東海散士 佳人の奇遇は、明治初期政治小説の先驅、明治十八年より三十年までの刊十
六冊、作者東海散士はペンネーム、本名柴四郎。會津の遺臣東海散士は米國費府の獨立閣に登つて無量
の感にうたれた。彼はそこで同じ亡國の悲憤を懷く愛蘭の美女紅蓮、西班牙の貴女幽蘭女史に邂逅し、
以下世界を舞臺にして事件を運んでゐる。その華麗を極めた表現は大いに世の歡迎を受けて、明治二十
年には「通俗佳人の奇遇」や「通俗佳人の奇遇」等さへ出た位である。

高山樗牛 本名林次郎、父齋藤親信は莊内藩士であつたが、伯父高山久平の養子となり、養父に従つ
て福島の地に成長した。それで明治十七年福島中學に入學したのである。上京後東京帝大哲學科に入り

在學中すでに「瀧口入道」の創作があつた。卒業後は主として雑誌「太陽」により文藝評論壇に立つて一世を指導したのであるが、彼の思想は大凡三轉してゐる。第一期は日本主義時代、第二期はニーチエズム時代、第三は日蓮主義時代である。彼は實に福島縣の育んだ明治時代第一の評論家であつた。明治三十五年十二月歿、年三十四。

會津節・のこる光 福島縣の郷土を素材とした小説も少くないが、その中の代表的のもの一つに後藤宙外の「會津節」と「のこる光」とがある。前者は明治三十六年四月の稿、後者は明治三十四年十二月の稿で兩者とも「明治大正文學全集」中に入つてゐて、作者の主観は入つてゐるが會津の風物を可なり刻明に描いて居り、人物も會津訛のまゝ記録されてゐるので方言資料ともなる部分がある。

野村隈畔 文藝評論家、本名善兵衛、明治十七年八月伊達の半田村に生れ大正十年十月歿した、年三十八、若くして哲學研究に志し、上京後英語獨語を獨學し、大正三年「ベルグソンと現代思潮」を著した頃から、少壯哲學者として盛名を走せた。その後東京音樂學校の哲學を講じたことなどがあつたが思想的行きづまりを打開することが出来なかつたやうである。上掲の外「現代文化の哲學」「自我批判の哲學」等著書が多い。

久米正雄 小説家・劇作家、明治二十四年十一月二十三日生れた。父の死後母の實家である郡山で少年時代を過した。縣立安積中學校を経て大正二年東京帝大英文科に入學した。卒業後は新進作家として

「受験生の手記」其他數多の短篇を作つた外、「螢草」「破船」等十數篇の長篇も作つてゐる。彼の作品は新技巧派とも稱すべく學生生活を取扱つたものや、氣の利いたユーモラスの氣を漂はせたものや、自傳心境小説的のものやがあるが、何れも明朗安易な作風を持してゐる。現今小説壇の大御所である。郷土關係のものには「阿武隈心中」等がある。

其の他の作家作品 福島縣に關係ある作家には其の他正木不如丘・矢田挿雲・中條百合子等少くない

四 國學・和歌

飛田昭規 明治前期の國學者。田村澤石の人、若うして江戸に出で平田篤胤の門に入つて神典・國書を修め、國學に造詣が深かつた。壯年尊王の大義を唱へ屢々人々の耳目を聳動した。維新後は佛耶二教を排して神道のために盡すことが多かつた。老來勤王の精神より賢所遙拜所を設立せんと請願すること數次に達したが、未だその達成を見ないで明治二十七年八月二十七日歿した。年七十一。「文字振起」其の他國學・神典に關する著書が多い。

安部井磐根 二本松藩の人、天保三年三月十七日生。父又之丞の廉直俠氣ある性を亨けて人となる。通稱惣右衛門、初め清介といひ後磐根と改む。幼より學を好む、青年時代日本居宜長の「直日靈」を讀みて感奮し古事記傳四十八卷を手寫し、益々我が國體及び皇道の淵源するところ深きを知るに至る。又和歌を好み博く歌集を涉獵し特に萬葉を愛讀した。長歌をよくしました古今風の短歌にもすぐれたもの

がある。家集を「眞清水合集」といふ。戊辰の役には一意國事に奔走し身を挺して君國に報ぜんとした明治時代福島縣會議長・衆議院副議長として政治的方面にも功績の多かつた人、大正五年十一月十九日歿、年八十五。

明日しらぬ老のいのちをさておきてことしも花のをしまるゝかな
をつくばもちゝぶもかすむ今日見ればいよよ果なきむさし野の原

難波江の春のけしきをよそにみて心なげにもかへる雁かな

天田愚庵 明治前期の歌人、日本の歌壇の主流とは殆ど没交渉であつたが非常にすぐれた歌人である平町に生れたが、明治戊申に十五歳で出陣し、歸來行方不明の父母と妹を尋ねて天下を周遊し數奇なる運命にあつた人。三十四歳の時、京都の林丘寺に入り得度して愚庵と號した。明治三十三年には桃山に移り同三十七年一月十七日歿した。年五十一。その歌風は總じて萬葉調で正岡子規の作歌に影響を與へたことは日本文學史上注意すべきことである。自然の歌・父母の歌に秀歌が多い。「愚庵遺稿」がある。

親を戀ひ泣くか子雀久方の雨にぬれつゝ泣くか子雀

まさきくていませ父母み佛のめぐみの末に逢はざらめやも

まな子われめぐり合へりと父母のその手をとれば夢はさめにき

服部躬治 明治後期の歌人、明治八年須賀川に生れた。大正十四年三月六日歿。年五十一。國學院に學び後淺香社に入つて落合直文に師事した。明治三十一年夏尾上柴舟等と雷會を組織して讀賣新聞に載せた。晩年は「萬著集」の評釋や國語辭典の編纂に従つたが、關東大震災にその草稿は失つて了つた。眼光透徹詩想豊麗であつたが理智的で議論が多かつた。彼の作品を知るには明治二十四年刊「迦具土」一巻がある。晶子の「みだれ髪」薫園の「片われ月」と並び稱せられた。令妹水野仙子亦歌人として令名がある。

君見ませ折る人無みに歳を經し野茨の花のこちよげなる

若やぎし聲朗詠となりにけり近衛づかさの春の夜の月

夕づく日とすれば葦にかぎろひてしぐるる中を君が船ゆく

其の他の人々 服部躬治の令妹水野仙子、若くして逝いた門間春雄等語るべき歌人は多い。最近福島縣の短歌は非常な勢で勃興しつゝあり、機關誌を持つ結社も追々多くなりつゝある。

五 俳句・川柳

三森幹雄 明治時代舊派俳壇の重鎮、通稱兼次、香南居と號した。福島縣の人、幼少から俳諧を好み二十六歳江戸に出て醒庵西馬の門に入つた。明治維新後は明治七年七月俳諧明倫社を創設し明倫雜誌を刊行して、俳諧を以て徳教に資せんとし、大いに道義的な俳句を鼓吹した。又大成教に屬して大成正

の位を受けた。後明治二十六年春秋庵十一世を嗣いだ。明治四十三年十月十七日歿。年八十二。
「俳諧自在法」「俳諧名譽談」等の著書がある。

今日にはや山にかぶさる櫻かな

心してくめば濁らぬ清水かな

容なき言葉を道の葉かな

大須賀乙字 名は績、中村町の人、父は漢詩人大須賀筠軒、明治四十一年帝大文科出身、東京音楽學校教授。碧梧桐派に属し俳論を以て聞えた。乙字は明治大正を通じての尤なるものであつた。その新傾向を論難して俳諧復古を説ける如き、寫生を難じて寫意を提唱せる如き特筆すべきである。大正九年一月二十日歿、年五十。著書に「故人春夏秋冬」「乙字俳論集」「乙字句集」等がある。

火遊びの我一人のしは枯野かな

豈それば我腮光る寒さかな

干足袋の日雨に氷る寒さかな

其他の人々 俳句には大橋水香・鐸木馬巖・富士崎放江・佐久間法師其他の人々が多くある。現在俳句は福島・須賀川・會津・相馬・本宮其他に俳社があり、川柳は白河・郡山等に結社がある。何れもそれれく機關雜誌を出して居る向が多いが紙数の都合で省略する。

六 紀行・日記

十符の菅薦 全編四卷、明治九年東北御巡幸の日記で正しくは「從駕日記十符の菅薦」である。宮内省文學御用掛近藤芳樹著。同御巡幸記唯一の官版である。「みちのくの十ふの菅ごも七ふには君を寢させて三ふにわれ寢ん」といふ袖中抄の和歌にその書名をとつたものである。著者は若くして本居大平に學び、更に山田以文に律令有職の學を學んだ。「薰風集」其他の著がある。

東巡録 權少史金井之恭の筆になる明治九年東北御巡行の日記。内閣より刊行。第一二卷は六月二日宮城啓譚七月二十一日還轅、前後五十日間の御巡幸あらせられた日記、第三卷は吏治、第四五卷奏對、第六卷は校院、第七卷工業、第八卷は賞恤、第九卷は祭祀、第十卷は名勝である。筆者は九州の人、若くして東奔西走王事に竭したが、歴任して元老院議官、貴族院議員に勅任せられた人である。

東北御巡幸記 岸田吟香の筆になる明治九年六月の東北御巡幸記である。吟香は東京日日新聞記者として請ひ従つたもの、随つてその文は同紙に連載されたものである。その率直なる表現は、大いに御巡幸の情景を悉くしてゐる。著者は津山の人、幼名太郎後銀次と改む。幼より神童視され奇才衆に超えてゐた、後へボン博士を助けて和英辭書を編んだが、明治六年招かれて東京日日新聞を主宰して大いに聲名をあげた。

山水小記 田山花袋の文、現代日本文學全集中、田山花袋集五二五頁以下にあるのが福島縣内常磐線

沿線の風景を描いてゐる。枯れた蕭洒たる筆致ながら、さすが捨てがたい所がある。

果知らずの記 正岡子規の筆、子規は明治三十五年歿したが、その歿前十年頃の記録である。福島縣を通過して日本三景の一である松島に憧憬の旅をし、奥羽一巡の後東京に歸つた。その間大いに詩囊を肥したものだと思ふが、その中に和歌及び俳句も入つてゐるのである。

二五、縣民性の考察

縣民性の研究は教育者には勿論、廣く郷土百般の生活に大切なことではあるが、其の長短は他縣と比較しての相對的なものであり、又研究者の人格、個性等主觀的條件に左右されることが大なるを免れないし、加ふるに民性は時々刻々に變化するところもあつて、流動的なものであり且つ一般的に觀たことは一地方部や一人一人について見れば必ずしも當らぬことがあるので、其の研究記述は中々至難な問題である。そこで出来るだけ全體の立場を取つて廣く全國を見渡して比較すると共に、環境や歴史や生活情況等あらゆる條件を調べて、なるべく考察の客觀化を圖る必要があると思ふ。

茲には之迄先輩が觀察記述した書物や永年本校生徒につき觀察したところや衆目の指示するところ等を參考とし、僅かに其の一端を書き將來研究のポイントを示さうとしたに過ぎない。

一、地勢氣候風土と縣民性

本縣は北緯三十六度四十三分より三十七度五十分の位置に介在し、面積の廣い割合に山岳起伏重疊して廣潤な沃土なく、太平洋沿岸を除いては磐城岩代の高原帯である。而して阿武隈川南北に貫流し、左右に兩山脈を伴ひ、地勢、氣候、風土は自ら濱通、中通、會津の三方部に分れて其の趣きを異にするを以て各方部の民性も亦相異つてゐる。

概して會津は盆地で峨々たる山々に圍まれ、冬期積雪も多い關係上、其の住民は重厚性に富み、正直朴訥で、郷黨の團結心強く、克苦勉勵する風あるも、稍々もすれば頑固で敏捷を缺く向がないではない。濱通は輕快で決斷に富み、勇往邁進の風あるも太平洋に面して海陸の天恵に浴し且つ氣候もよい爲め忍耐、持久、努力心等割合に旺盛を缺き又氣荒く稍々粗暴のところもないではない。

中通鐵道沿線地帯は交通も比較的早く開け、他縣人の出入も多く文化も進んだ爲めか常識に富み圓滑で敏捷なるも、稍々狹量で感情強く、重厚朴訥の點に於ては他に劣る向もある。

併し濱通も中通も南部と北部とは異つてゐるから同じやうには言へない、尙之等三方部の民性については後にもつと詳しく記述する。

二、生物分布と縣民性

本縣面積の廣さは全國中でも第二位のところにあり、然も總面積の八割は山林原野であるから、鳥獸の棲息多く、田村・安積・相馬・東白川・西白河・石川・岩瀬地方は馬を産し、會津盆地は牛馬を飼育し、又養蠶・養雞・養豚も相當盛であるし、其他鳥を飼ひ、犬を愛し猫を養ひ、かくて其間に動物愛護溫和・慈愛の民性を養ふに至つた。

動物に次いで植物も比較的豊富で、山林は頗る用材に富み、原野には米穀・蔬菜・果樹・繁茂し、原住民以來概ね農業を營んで來た關係上、是れ亦溫和性を向上せしめたと共に重厚・着實・悠長等の民性を醸成してゐる。

又鑛物も比較的豊かで、阿武隈山脈は石炭等の鑛山に富み、半田銀山、大森金山は嘗て有力な財源をなしたことがあり、更に磐城方面には石炭多く今尙盛に採掘しつゝあるが、特に此の方面の民性は其の地勢・氣候・風土と所謂鑛山氣風との影響を受け決斷に富み、敏捷で進取的であると共に氣荒く粗暴の傾きありとも觀られてゐる。

三、産業經濟と縣民性

本縣の産業は農業、水産業、鑛業、工業、商業、交通業、公務自由業、其他であるが何と言つても農業本位の縣民である。

農業は氣候、地勢に左右されることが大で、近世になつてからも度々凶作に見舞はれ、其の都度縣民は不安に陥り、運を天に任す風を生じ、やがて日和見根性を培養したやうである。併し農業は土地に親み、競争も激烈ならず、平和に耕土の恩恵に依て生活するところから、郷土親昵執着の風を培ひ、善く言つて堅實性悪く言つて陋習にとらはれ易い性質を生じ、家族制度もよく行はれ、從て家族は戸主に從順忠實であり、引いては長上官權の命によく服する風を生じ、又祖先崇拜・忠君愛國の思想も醸成されて來たが長上官權に對する依頼心を生じ、權利を主張せぬ代り義務も遂行せぬ風と化し、自立自營の思想幼稚で進取・發展・向上の氣風に乏しく比較的、動・植・鑛等の天産に恵まれながら資源開拓に拙劣で、産業の經營は新來の他府縣人に壓倒される傾向があつたやうである。

翻つて産業の歴史的立場から考察するに、嘗て會津戦争の終るや、戦後の復興に力を致す餘裕もなく直ちに當時の自由黨に身を投じ、素朴な民衆は所謂政治家と自稱する者に左右されて其の提灯持ちをなし、興業・殖産・富力恢復の方策を立てず科學的の教養を顧みず、不生産的な政治思想・政黨競争・勢力争ひに没頭した。かくて古來の感受性、反抗心等の傳統を露骨に發露し、市町村會の選舉にすら自治體の本義を没却して互に紛擾を醸し、縣會・國會の議員選舉に際しては不眠不休血眼になり、家事も親類も忘れて狂奔する場合もなかつたではない、此の弊風はやがて經濟界・事業界にも魔手を延ばし、會社工場にも金融機關にも水利事業にも、産業組合・農商工組合にも悪影響を及ぼすものあり、其の結果

一時本縣の産業界の多くは實蹟が擧がらぬ情況を呈したやうであつた。

四、政治と縣民性

先づ自治制の方面について見るに、明治二十一年市町村制實施當時は町村長・村會議員の如きも皆傳統的な家柄名望の高い人々が選ばれ、よく隣保團結の舊慣・義理・人情の徳誼が實現され、平和な自治體を組織した、然るに二十五年頃から不幸にも所謂黨派根性なるものを發生し、選舉運動が盛となり、其の結果は一村一郷の利益を棄て、自黨の犠牲としても顧みぬ有様となり、村治紊亂、騷擾事件を惹起する向もあり、福利民福産業の發達は阻害されると共に、利己主義・個人主義の氣風も濃厚となつたやうであるが、今日は縣民の自覺其他に依り次第に矯正されつゝある。

次に官治行政を見るに、政黨政治の以前は多く西南地方の人が縣令知事として來任し、恰も官吏貴族時代を呈したから、縣治上にも尠からぬ壓迫と強制的取扱ひがなされて、其の都度原住民以來の反抗的態度を暴露したこともあるが、又一面には感激性に富んでゐる結果、一度信賴すれば従順な良民であつた。

五、犯罪と縣民性

福島地方裁判所の示す犯罪統計を見ると、其の件数は時に變つてはあつたが大體窃盜・詐欺・横領を筆頭として傷害・森林法違反・自轉車取締法違反・賭博・文書偽造・度量衡違反・選舉法違反等の順序になつてゐて、強盜・殺人・誘拐・脅迫・恐喝等は少い方で騷擾・重婚等は殆んどない。之を強盜・殺人・誘拐・脅迫等の比較的多い東京地方や殺人・強盜・傷害等の割に多い山梨・茨城等の東京近縣や偽造・詐欺・誘拐・強盜等の多い京阪地方等に比較して、縣民性を推察すると、比較的平和、溫良を示し殺伐な氣風は少いやうである。割合に悪性の知能犯が少いことは永い間近代文明から遠ざかつてゐて、比較的純朴、率直の爲めでもあらうか、傷害が割合にあることは矢張率直、單純であると共に一面感激性に富む所以でもあらう。併し割に詐欺・横領・森林法違反・酒造法違反等の多いことは、或は明朗性を缺き稍々する向もあるではないかと思はれる。日常生活に於ても契約が嚴重に實行されず、賣買に掛引きが多いこと等も或は其の爲めであらう。併し森林法・酒造法違反等は一面に封建時代から法規制定以前にかけて山林盜伐・濁酒醸造を默認されてゐた習慣も原因することであつて或種の犯罪に依つてのみ縣民性の速斷は出來ない。

六、年中行事と縣民性

縣民の年中行事を列擧することは容易ならざることであり、紙面にも限りがあるから記述は他日に譲

るとして、之等の年中行事を通覧するに純朴であつて野趣に富むもの、剛健勇壯なもの、祖先崇拜によるもの、民間信仰によるもの、社交協調性によるもの等が多いやうであつて、民性の一端を知るに足る

七、宗教と縣民性

本縣に於て神道・佛教・基督教の三教が民性に及ぼした影響は他縣と大同小異で特筆する程のものもないが、寧ろ縣民の宗教的信仰は全國的に見て概ね薄弱の方ではないかと思はれる。それは住民が單純素朴・樂天的で現實主義に強く、山林原野の廣土に育つて自然萬象に親しんで來た結果からか、因果應報や生死輪廻に執着せず、深遠なる哲理や宿命・來世等の念は縣民祖先以來能事としなかつた爲めでもあらう。併し此の民性は反面に神道にもあらず佛教・基督教にも屬しない所謂民間信仰なるものをして相當に勢力あらしめた。今一々茲に事例を擧ぐるの紙面を許されぬけれども傳説・物語等に現れた怪異憑俗や生殖器崇拜や祈禱・禁厭等の類の多きを見てもそれが明瞭である。

八、會津方部民性

(イ) 自然環境から觀た民性

此の地の氣候・風土・乾濕等の地理的自然環境は農業に適するを以て、上代より農業を以て生業とし

民衆の大多數は農業に従事してゐた。農業は氣候風土に左右せらるゝこと多く、土壤・水分・日光・空氣等の自然の力に従ふことを要し、この自然に従ふ心が従順性を養ひ、温和の風を馴致した。然も勤勉着實性を養ひ剛健質實・率直・朴訥に導いた。且つ農業は定住固定の生業なるが故に隣保相和し、溫情の徳を養ひ、理屈を抜きにして感情美の民性を醸成した。又會津は四圍山を廻らし、山紫水明の地なれど或は險路峻坂に防げられ、或は降雪期永き爲め、運輸・交通・通信に事缺き殊に一つの藩に抱擁されてその支配に屬した爲め、他地方との接觸少く、自畫自讃で進んで來たので郷土愛強く、御國自慢が強くなり、傳統を重んじ、反面に保守・頑迷・固陋となつた向もある。又敏捷を缺き素朴性・無頓着性を醸成し、流暢の辯・優雅な舉措・如才なさ・周到の氣配りなどは會津人の長所ではない。且つ環境は火山帯に屬し磐梯山の如きは爆發性を帯びてゐたのにも似て、當地人は感情強く所謂ボツコ腹立つといふ民性を示してゐるし、五ヶ月に亘る降雪濃霧は天空の快澗を見ず、陰雲靉靄として民性潤達・磊落・清酒たるところは少いが奥床しさ、懐しさ近づかんとして近づき得ないやうな惱みと親しみを感ずる。

(ロ) 歴史上から觀た民性

此の地方の移民住者の多くは尙武的な開拓者であつて、特に蘆名・蒲生兩氏の時代は武を尙び、保科氏以來は武道と教育とを特に奨勵した爲め尙武の風上下に充ちた。特に藩祖正之は品性の薰陶に重きを置き、夙に當時の大儒山崎闇齋を招いて儒教を聞き、孝悌・忠信・篤實を以て本とし、老・佛の教を退

けて朱子の教に則り、吉川惟足を招いて神道の復興を圖る等大いに道德の教養に努め、奢侈を斥け、質素を重んじ、柔弱を排して質實剛健の民性を鍛錬した。加ふるに農民に個性づけられた感恩性は、武士の廉恥性と照應し、一層道義心を高め、律義を致し是が幕末戊辰會津藩の義憤となり、藩士の結束・忠誠・白虎隊の壯烈・娘子烈婦の殉節となつたのである。併し昔から領主の變遷ある毎に漂泊の士や浪人達が殖えて來たが、之等は土着して農業を營む者もあれば、富豪となつて此の地に勢力を持つ者もあつて、何れも嘗ては武人であつたことを誇り、門閥なりと稱して自負し、竟に尊大性を生ずると共に浮浪の士は新領主を喜ばず、統治を非難攻撃し、他を誹謗する向がないではなかつた。又此の尊大性は益々保守性を強くし、小成に安んじ進取性を放擲し、偏狹性、頑固性、執拗性等と結びつき、合理性を没して單方的に一種の民性を形成したやうでもある。

今や世は明治・大正・昭和と變轉し、民人の來往移動甚しく全國的大勢に壓せられ、若くは生存競争の必然的要求等より漸次民人の性行にも變化混和を見るに至つたが、會津生粹の民人には容易に變轉せざる根強き個性がある。

九、中通方部民性

(一) 中通縣南民性

(イ) 自然環境から觀た民性

縣南とは阿武隈川流域の高原にある田村・石川・東白川・西白河・岩瀬・安積の六郡をいふ。一般に山岳重疊として處々に屹立し、其間に閭里が介在してゐる。従て通信、交通の便より久しく遠ざかつてゐたから、都會の華奢輕薄の風に染むことなく、人情自ら古風を存し、飾り氣なく率直な生活を通じて來た。土地廣大な割に人口稀薄で或は谷間に或は山腹に或は峰に小部落をなし、よく和しよく扶けて苦樂を共にし、隣保郷黨相扶け合ふ温情豊かな民性が自然に養はれ、團結心を馴致し愛郷心を養成した。又土地は農業を主とし農業立國特有の從順性・勤勉性・着實性・質實剛健性・堅忍性持久性が陶冶された。

併し以上長所の裏面には短所がないでもない、素朴性の裏面には粗野性あり、作法には無頓着である。現實性の反面には未來を考へ、遠大を圖り、神聖感を抱くが如き宗教心乏しく、却つて迷信が甚だ多い。且つ屋内に籠居し閑散にして飲み食ひを助長し、不規律となり、時間勵行や集會は不確實で社會的訓練が不十分の向もある。

(ロ) 歴史上から觀た民性

此の地は寛永以降明治維新に至るまで幕領及び各藩に屬したが、幕領は貢租・雜役・藩領に比すれば頗る緩かであつて、且つ諸般の制裁も寛大であつたから、自ら放恣遊惰の風を生じて、それが未

だに残つてゐる向もある。藩領は門地を尊崇し、新古の待遇に懸隔があつたから互に門地を誇張して尊大・自負・倨傲の風をなしたやうである。

(二) 中通信達一市三郡民性

(イ) 自然環境から觀た民性

本地方の地勢を觀るに福島縣の北部に位し、東阿武隈山脈と西奥羽山脈との間に阿武隈川貫流し、其の沿岸には肥沃な信達平野がある。信達平野は阿武隈川の沖積土よりなり、土壤極めて肥沃で又西南の山地は比較的地味が肥えてゐるから古から農業は相當に發達し、質實剛健・從順・温和・素朴等農民特有の民性を有することは前掲と同様である。又此の地方は桑園經營に適し、古來蠶業が盛であるが、養蠶は短期間に非常に繁忙を極め、且つ收繭の販賣についても機敏に事を處理して行く必要があるが、且つ農業と並行して行く爲め自ら機敏性が養はれて來たし、又景氣のよい時は一時に何千何百の金が懐にころげ込んで來たので氣が大きくなり、抱擁性等も養はれてゐる。併し反面に短所も伴ふもので、氣候の變化や繭、生絲、羽二重等の相場の激變等の影響に依り住民は投機的となり、薄弱な態度も加つて眞摯性を缺くところもあり、又經濟界の變動に依り敏活に營利専念に立廻らねばならぬ關係上、自然利己的に走り、やがて黨派性も養はれた向もある。

(ロ) 歴史上から觀た民性

源頼朝奥羽追討の際に藤原朝宗戦功に依つて伊達郡を賜り、姓を伊達と改め伊達氏の祖となつた。其後數代無事平穩であつたが、行朝の時代に於いて、北畠顯家陸奥守鎮守府將軍となつて多賀城に據るや、行朝顯家に從ひ賊軍を破て戦功を立て、右近衛將軍評定兼引附役に列した。其の子孫宗遠其の子政宗等伊達氏は代々南朝の忠臣として忠勤を勵み、東北の鎮雄として威勢を天下に振ふに至つたが、地方民はよく此の間に處し、勤王性、忠君の精神、尙武性、廉恥心等の正道を知るに至り又虚飾を排して質素を重んじ、遊惰安逸を斥け鍛錬を尊ぶ氣風が培はれた。然るに之等の民性は伊達氏なり蒲生氏なり、上杉氏なりが當地方に居城を一定して淳々と之を馴致したものでなく、伊達氏は其の代毎に居城を轉々として變へ、蒲生氏は遠く會津の地から家臣を以て治めしめ、上杉氏も亦直接城下の民として撫育したものでなかつたから、尙武的精神は形式に流れ、主従の情誼等は内容充實せず、却つて粗暴性を生じた向もある。其の上舊藩時代には戦亂止むなき状態であつたから地方民は或は其の苦衷を訴へるといふ有様で、自然反抗心も培はれ、近時でも出縣陳情する者の數比較的多いと稱せらる。又各藩主や城主は何れも領土の武力的擴張に専念するか、さもなくば檢地を嚴にして人民より多くの徴租をなさんとする以外に文化事業を興し、民福を増進する暇も少かつた爲め、學問・藝術・經濟に精進し、將來の發展を望む態度乏しく、進取の氣象に缺くる向もないではない。

一〇、濱通方部民性

(一) 濱通縣南石城民性

(イ) 自然環境から觀た民性

他地方に比し氣候溫暖・交通便利で、早くから他縣人とも接觸が多かつた爲め、動作も概して敏捷で、言語も明瞭の方であるし、快活で交際も比較的圓滑である。加ふるに地勢上職業分布は廣く、農・商・漁・鑛等に亘つた爲め、其の職業の性質上元氣潑潑・進取的・活動的であると共に、物に對し敏感で殊に炭坑地帯には不慮の災難多く、事に當て發奮もし、義狹的行爲も見出し得る。

併し長所の反面に短所があつて炭坑、海濱の生活は粗野で、思慮に乏しく直情徑行になり易く、永續性、堅忍性、重厚性を缺き、質素節約の心薄く、又鑛山生活の勞賃關係、漁業・鑛業其他の商取引關係は自己的打算的な傾向を生み、義理人情や責任の感にも缺くる點がないではない。

(ロ) 歴史上から觀た民性

封建時代より各藩分立して互に敵視し、久しく融合統一がなかつたことと、交通・生業上、他郷人の混入比較的多かつたことの爲め、共同團結心乏しく競争心、反目心強き傾きもある。

(二) 濱通双相民性

當地は縣の東部に位し、西は阿武隈山脈に依て遮られ、東は太平洋に面し、地味肥沃、氣候溫和で、農業・水産の利多く、加ふるに北部は相馬藩の領地として數百年の間同藩の治下にあり、而して饑饉衰勢に遇つては二宮尊徳先生の指導を仰いだし、又南部は幕府直轄の地として世々代官の治下にあつたが此の二方面は遂に合して獨特の相馬民性を醸成したのである。當地方が一面農業地として農業獨特の溫和・着實・淳朴等の民性を生んだことは前掲と大同小異であるが、藩時代から質素・勤勉・至誠事に當る美風が陶冶せられ、殊に馬の飼育盛んで藩主の馬に對する保護と飼主の仔飼の時から醸成された愛馬心は、引いては家畜愛護の念ともなつた。又天明・天保數次の凶作飢饉に依り、住民は一致協力互に同情親切を以て善後策に當り、荒蕪を拓き藩主亦よく民を救ひ、勤勉を勵めた爲め、隣保相助・同情・親切等の美風を有するに至つた。

又舊藩時代の總鎮守妙見神社を盛んに祭る風あり、各部落毎に一社若しくは數社あり、毎年春秋二季の大祭には戸毎に參拜する等長い間の傳統は敬神の性情を養ふばかりでなく、此の地方は特に野馬追祭等に依り古風を慕ひ、祖先崇拜の風もあり、其他義理を重んじ、儉約を重んずる等舊藩主及び二宮尊徳先生の教訓指導に基くものが少くない。

併し長所の反面に短所は免れないもので、漁村の生活の常として、言語は粗野、應接拙劣なるを見る又家門を尊び同族に對する同情の念に富むも、一方には同族の庇護になれ、依頼心強く、堅忍不拔の

氣象に乏しく、又氣候比較的温和で海陸天産の恩恵に浴し、加ふるに他縣人との接衝も少かつた爲め競争心乏しく、敏捷を缺き、公德心少き向きもある。

一二、縣民性と教育

凡そ如何なる縣民性と雖も長短兩相は免れぬことであるが、縣民各自と教育者とがよく民性を自覺し短所を反省して採長補短よろしきを得るやうに教育してゆくことは郷土の發展向上の爲めにも最も大切である。而して是が教育矯正の方法は時と所とに依て異り單純なものではない。

附 録

福島縣師範學校郷土研究項目

一、序 論

- 1 地理的位置とその依存的特徴
- 2 郷土地域と接壤地域との關係

二、自然要素の研究

- 1 地形地質並びに土壤
- 2 地理的區分とその地域性
- 3 氣候型の分類とその特色
- 4 微氣候と地形との結合關係
- 5 寒冷氣候とその地域的研究
- 6 動植物の分布
- 7 天産と生活環境

三、史的發展の研究

- 1 本縣通史の概説
- 2 先史時代の生活状態
- 3 國衛及郷の位置
- 4 地方豪族の興起
- 5 會津藩に於ける經濟政策
- 6 二本松藩に於ける經濟政策
- 7 徳川時代に於ける諸藩の經營
- 8 二宮尊徳翁と相馬藩
- 9 明治維新前後の經濟的社會的變化
- 10 生活環境としての歴史的背景

四、住民と戸口

- 1 總説 (住民と戸口の概要)
- 2 人口の分布と密度
- 3 人口の地域的特異性
- 4 徳川時代に於ける人口問題
- 5 明治以後の人口動態
- 6 人口構成
- 7 人口動態

五、産業と經濟

- 8 村落人口と都市人口
- 9 地域性による人口問題

A 産業

- 1 主産業の變遷と現況
- 2 自然的資源と産業の地域的特色
- 3 産業の史的發達過程
- 4 徳川時代各藩に於ける産業政策とその影響
- 5 土地調
- 6 農業の自然とその場所
- 7 養蠶業の沿革と農家經濟との關係並びにその移化について
- 8 製絲機業の分布とその變遷
- 9 牧馬地域
- 10 果樹栽培
- 11 林業とその發達
- 12 水産業とその發達
- 13 陶磁器業と漆器業
- 14 鑛物資源の開發史とその利用

- 15 炭田地域と經濟關係
- 16 製造工業
- 17 工藝品(農民工藝品)
- 18 主なる副業

B 經濟

- 1 産業と經濟との關係
- 2 地域利用と經濟
- 3 土地制度特に小作制度と最近の傾向
- 4 金融機關
- 5 産業助成機關及びその活動狀態
- 6 商業の一般とその變遷
- 7 經濟的推移と生活との關係

六、村落と都市

A 村落

- 1 村落の發生過程
- 2 村落の形態とその特色
- 3 村落生活の現動向
- 4 特殊村落(溫泉、市場、海水浴場、社寺等)

B 都市

- 1 都市の發生と形態
- 2 核的都市の經濟的關係
- 3 城下町、宿場町とその現在
- 4 福島、若松、郡山三市の研究

七、行政と財政

- 1 縣行政の變遷
- 2 市町村行政の變遷
- 3 政治思想の發達と政黨
- 4 行政機關の現狀と機能
- 5 縣財政と經濟との關係
- 6 農村、都市の財政と經濟との關係
- 7 納税の慣習

八、社會と教育

社會

- 1 各時代の社會狀態
- 2 各地域に於ける社會制度の舊慣(部落制度一般)

- 3 地域別による縣民性と社會
- 4 社會施設（保健衛生も含む）
- 5 各地域に於ける風紀と犯罪
- 6 娛樂機關
- 7 圖書館其他

B 教育

- 1 明治以前の教育狀況
（寺小屋、藩學、私塾等の發達と其教育内容）
- 2 普通教育
- 3 青年學校教育
- 4 中等以上の教育
- 5 特殊教育
- 6 社會教育

九、交通

- 1 自然環境と交通
- 2 道路交通の變遷（驛傳、驛路、宿驛關趾）
- 3 河川交通の變遷
- 4 鐵道の發達とその影響

一〇、文化

- 5 交通機關の種類とその利用狀態
- 6 交通網（産業休養帶との關係）
- 7 港灣とその利用
- 8 通信機關
- 1 文化とその發達過程
- 2 遺跡にあらはれた地方的文化の相異とその變遷
- 3 神社宗教及び其他の團體
- 4 文化的記念物（遺跡、碑及び塔、口碑傳説其他）
- 5 國寶及び保護建造物
- 6 民俗（住家、用具其他）
- 7 俚 諺
- 8 郷土藝術
- 9 方 言
- 10 地名考

一一、人物及びその事蹟

一一、結論（總括的調査と郷土の理想的經營）

備考

右項目は昭和六年に設定せる本校郷土研究項目を今回再檢討設定せるもので各學科の綜合的研究項目である。

昭和十一年三月十五日印刷
昭和十一年三月二十五日發行

【非賣品】

福島縣師範學校内
發行人 及川 彌平
福島市荒町二二
印刷人 草刈 陽
福島市荒町二二
印刷所 草刈印刷所
發行所 福島縣師範學校

終

